

〈論文〉

高校生と大学生の英語学習への モチベーション

小島和枝

要旨

必修英語を受講している大学生は、高校受験を終え、テスト疲れや苦手意識などの理由から英語学習へのモチベーションが低いと言われている。対照的に高校生は、入学試験に英語が必要なことが多い理由から英語学習へのモチベーションは高いとされている。しかし高等教育が進んでいる日本では、高校卒業後、大学で学ぶという選択をする割合が増えている。社会で活躍をするには英語の必要性を感じ大学生の英語学習へのモチベーションを維持し続けても良いのではないか。その疑問から高校生と大学生の英語学習に対するモチベーション調査を行うことにした。そこでわかったことは、大学生も英語はできるようになりたいと考えていた。モチベーションは低いとは言いきれない結果となった。

キーワード：英語、モチベーション、学習

1. はじめに

先行研究から日本の英語学習者達は、大学受験に向けて英語を勉強してきたが、大学受験後、テスト疲れと目標がなくなり、モチベーションが下がり大学生のディモチベーションとなっている (Berwick and Ross, 1989; Ushioda, 2013)。しかし、高校3年生 991 人に調査した研究結

果によると大学入試が終わっている高校卒業時点で60%以上が「これからも英語を頑張って勉強したい」という質問に対し「そう思う」もしくは「まあ思う」と答えている（ベネッセ、2021年）。この結果から入試という大きな試験後も英語を学んでいきたいというモチベーションはあるということになる。そのことを考慮すると先行研究の大学生は英語を学ぶモチベーションは下がっている（Berwick and Ross, 1989; Ushioda, 2013）という発見にはギャップがある可能性はないだろうか。大学入学後にまだ英語を学ぶということにモチベーションを持ち続けている可能性があるのではないか。

大学入学後、英語に対するモチベーションはどのような変化があるのか。そこで、大学受験を考えている高校の学習者と大学の学習者の比較調査をすることにした。中学校や高等学校の英語学習に対する調査や研究は文部科学省を含め存在するが、大学生と高校生の英語学習に対する比較調査は少ない。そして、高校生と大学生のモチベーション比較調査や研究は見つけることができなかった。しかし、第二言語学習者、英語学習者のモチベーションの経緯や変化を探っていくことが、今後の大学英語教育や英語教育全体にも役立っていくと考える。

2. 背景：日本の大学進学状況

2.1 高等教育進学率

2021年度の文部科学省の調査によると大学進学率は54.9%と過去最高となっている（文部科学省、2021年）。大学の進学率の伸びもあり、高等教育への進学率は83.8%（大学：54.9%、短期大学：4%、専門学校：24%、高等専門学校4年：0.9%）となっている（文部科学省、2021年）。この調査からすると高等教育への大学進学率は毎年ほぼ伸びを示しているが、短期大学、専門学校、高等専門学校4年生は横ばいである（文部科学

省, 2021年)。2021年, 経済協力開発機構 (OECD) が調べた高等教育修了者 (25歳~34歳) は, 参加国 45カ国中, 1位は韓国 (69.3%), 2位はカナダ (66.4%), 日本は3位 (64.8%) となっている (OECD, 2021年)。世界の中から見ても現在日本は高等教育への進学率, 修了者は多いと考えられる。

2.2 大学入試

大学入試では, 一般選抜, 総合型選抜, 学校推薦型選抜があるが, 英語は文系と理系の試験に必要となることが多い。2022年4月から文部科学省が取り決めた大学英語入試は, 4技能の結果を大学入試に取り入れるということだったが見送りとなった (文部科学省, 2019年)。受験者が英語試験を受け, その結果を大学へ提供するという大学入試英語成績提供システムで大学側に個々で利用して欲しいと説明している (文部科学省, 2019年)。

2023年, 実用英語検定 (英検) の発表によると受験者も毎年, 増加し中学・高等学校の生徒が多い。2021年4月から2022年3月までに中高生は複数回受験をしている可能性はあるが, 300万人以上が受験している (英検, 2023年)。中学生や高等学校生の英語の重要性を示しているのではないだろうか。日本では英語は極めて重要な語学として扱われ, 入試に関わる科目となっている (Galloway, 2013年)。そのため, 日本人は英語を学ぶという学習意欲, モチベーションは高いのではないか。

3. 先行研究

3.1 モチベーション

モチベーションとは, 教育心理学上の言葉で日本語では「動機付け」「意欲付け」と訳され, 教育の現場でも使われている (西澤, 2001

年)。教師から教えられるものではなく、自主的・自律的・個性的な学習が行われるべきだとしている（西澤，2021年：36）。人間の労働とモチベーションの関係を研究している心理学で著名な研究者 Kanfer は、学説は様々あるが、モチベーションとなる主なこととして3つ考えられるとしている（1990：81）。① need-motive value “原動力の必要性”とはモチベーションを持つには、個々の目的や目標を持つことによって保たれ、社会生活の上では、人の上に立ちたいや、競争力、目標に向かってチャレンジする等、通常持たれるものである（Kanfer, 1990：84）。② cognitive choice “認知行動の選択”とはどれだけ努力をするかを選択し、決断し、時間や努力を目標に向かってしていくことができるかだ（Kanfer, 1990：85）。③ self-regulation-metacognition “自己制御認知”とは目標に向けてモチベーションを維持し、高めるために行動し、打ち勝っていくかという戦略や学びや行動をするプロセスのことだ（Kanfer, 1990：82）。TESOL（Teaching English to Speakers of Other Languages）第二言語学習のモチベーション研究たちは、Kanfer の心理学モチベーションから理論を発展させた（Dörnyei,2005; Ellis, 2003; Gardner, 2001）。語学を学ぶ際には目標を明確に持ち（Ellis, 2003）、言語を楽しく継続的に学び、多少の緊張感を持ちながら学ぶことが重要である（Dörnyei, 2005）。その反対で、モチベーションが下がっている状態はどのようなものなのか。

3.2 ディモチベーション

ディモチベーションとは、言語学習では言語を学ぶモチベーションが下がっている現象である（Ushioda, 2013年）。日本の大学生のディモチベーションが起きている理由を大学まで試験ばかり強いられてきたことが原因であるとしている（Ushioda, 2013年）。Berwick and Ross (1989) は、大学に入学したばかりの日本大学生 90 名にモチヴェー

ション調査をし、多少の学生は英語を学びたいという気持ちを持った者はいるが、大部分は入学後、モチベーションが落ちていると結論づけている。そして、高校3年生の受験前が英語学習に対して、最もモチベーションが高い時期だと説明している (Berwick and Ross, 1989)。

2009年に3カ国(日本、イラン、中国)英語学習モチベーション比較調査が行われ、日本人とイラン人の言語学習者は中国人に比べて、クラスでの学び方とモチベーションと関係があまりないことが結論づけられている (Taguchi et al., 2009)。日本人とイラン人の学習者はどのように英語を学ぶか、例えば教材や学び方により英語に対するモチベーションに変化が見られるという結果になった (Taguchi et al., 2009)。中国人学習者は他国の学生よりも英語を習得することと社会で成功するというプレッシャーが強いからとしている (Taguchi et al., 2009)。このことから考えると、日本人学生には、社会での成功は英語が関係している傾向がそれほど強くはないという現れなのか。もしくは、社会での成功とは根本的に中国人の学習者とは異なっているのか。就職を見ると2022年の大学等卒業予定者の就職内定状況調査では、前年度より2.9ポイント上がり、74.1%としている (文部科学省, 2022年)。そして、日本の失業率は2.4%である (総務省, 2023)。調査参加国187カ国中、世界の平均失業率が6.8%、日本は168位であった (ILO, 2021)。

4. 調査

4.1 目的

ディモチベーションの箇所でも述べたが、先行研究の Berwick and Ross は、高等学校3年生の時にモチベーションが最も高く、その後、大学入学後にモチベーションが下がっていると示している (1989)。

1. で説明した高校3年生991人に調査した研究結果でも「これからも英語

を頑張って勉強したい」と考えている学習者が60%を超えている（ベネッセ, 2021年）。しかし, Berwick and Ross (1989) の回答者は高校3年生とあり, この高校生991名の調査は高校卒業時とあるので, 進路が決まった後ということになる。進路が決まった後にも, 今後も英語を学んでいきたいと考えている回答者が多く, 先行研究の Berwick and Ross (1989) や Ushioda (2013) らの入試や試験疲れにより, 英語のモチベーションが下がっているということにギャップを感じる。

そこで, 高校生と大学生に同じもしくは類似した質問をし, 特にモチベーションの変動や過程に着目していきたい。そして, 類似点と相違点を探すことを目標とする。予想としては, 大学入学後も多少の変化は見られるとは思いますが, 高校生のモチベーションはあまり変化がないのではないか。理由としては, 日本もグローバル化が進み英語は他の言語よりも重要な位置と扱われ, 必修で英語を学ぶことが多く, 学校も国も力を入れて勉強に励んでいる (Galloway, 2013)。現在は小学校の必修教育化となり益々, 社会全体も英語の必要性を感じているのではないか。そのようなことから考えると大学入学後もモチベーションは高く, 持ち続けているのではないだろうか。大学生の英語学習のモチベーションは下がっているとされているが, そうだとすれば何故, そのような傾向にあるのか。原因や高校生から大学生になる中でのプロセスを少しでも理解できればと思う。そして, この研究結果を今後の第二言語習得方法の研究, 授業作りに役立ていくことを目的とする。

4.2 方法

アンケートを大学生と高校生に行い, 形式は自由回答形式と多肢選択にした。質問の初めは, 多肢選択にすることで回答しやすくし, その回答内容や理由を詳しく述べられるように自由回答形式にした。執筆者がアクセスできる回答者の中から便宜的標本抽出法, 便宜的なサンプルを選択し

た。そして、その中から大学を希望している高校生を選ぶことから合目的なサンプリングを使用した。便宜的で合理的なサンプリングを利用することにより、調査が比較的短時間で簡単にアクセスできるようになる利点ではあるが、サンプルが偏りがちになる可能性から全体的な一般的なデータとしてみることができない (Leitch, 2010)。しかし回答者たちの経験や意見を聞くことにより統計や大きなデータから見過ぎてしまうことが、見える可能性は生まれる (Patton, 2001)。倫理的配慮のため、学校名や個人が特定できないよう詳しく述べないように配慮をした。しかし、次の回答者で特定できない範囲で回答者については説明をする。

アンケートは、3つのカテゴリーにわけた。1) サンプルの背景を知り、英語に対する考えを尋ねた。2つめは、Kanfer (1990) のモチベーション理論の① need-motive value 英語を“原動力の必要性”を探る。3つめは、Kanfer (1990) の② cognitive choice “認知行動の選択”「英語を学ぶことに何らかの目標や目的となるようなモチベーションはあるのか」と③ self-regulation-metacognition “自己制御認知”「モチベーションを持ち、保つために何か行動をとっているのか」に焦点を置いた。どのような素晴らしい教育を受けていたとしても語学習得には時間が必要とされ、自己の努力が必要となってくることから目的を持ち、その目的を達成するための努力や対策、目標はどのようなことなのかを探ることとした。

4.3 回答者

必修で英語を学んでいる大学生と大学進学も目指している高校生を調査対象とした。東京と東京近郊の大学生、男性 88 名 (1 年生 : 52 名 : 2 年生 : 1 名 : 3 年生 : 30 名, 4 年生 5 名), 女性 19 名 (1 年生 : 3 名 : 2 年生 : 1 名 : 14 名 : 4 年生 : 1 名) の 107 名。高校生は全員 2 年生で、男性 74 名, 女性 54 名の合計 128 名であった。

5. 結果

5.1 回答者の背景

アンケート回答者の英語に対する 1) 回答者の背景を知るために英語についてどう考えているかを質問した。

表 1 英語について

	好き	どちらかという 好き	どちらかという 嫌い	嫌い	無効
高校生：男性 (n=74)	10.8% (n=8)	36.5% (n=27)	29.7% (n=22)	23% (n=17)	0%
高校生：女性 (n=54)	11.1% (n=6)	40.7% (n=22)	24% (n=13)	24% (n=13)	0%
高校生：男女 (n=128)	11% (n=14)	38.3% (n=49)	27.3% (n=35)	23.4% (n=30)	0%
大学生：男性 (n=88)	6.8% (n=6)	36.3% (n=32)	39.8% (n=35)	17% (n=15)	0%
大学生：女性 (n=19)	5.5% (n=1)	31.6% (n=6)	52.6% (n=10)	5.3% (n=1)	5.4% (n=1)
大学生：男女 (n=107)	6.5% (n=7)	35.5% (n=38)	42.1% (n=45)	15% (n=16)	0.93% (n=1)

表 1 から見ると「英語が好き」, 「どちらかという好き」(高校生男性：47.3%, 高校生女性：51.8% : 大学生男性：43.1%, 大学生女性：37.1%) と「どちらかという嫌い」, 「嫌い」(高校生男性：52.7%, 高校生女性：48%, 大学生男性：56.8%, 大学生女性：57.9%) でわけると高校生女性と大学生女性を比較すると 10% 以上の差があることがわかった。しかし「好き」, 「どちらかという好き」と「嫌い」, 「どちらかという嫌い」にみると高校生の方が大学生よりも英語を好きと感じている割合が高い傾向にある。

この高校では英語を必修科目としているが、英語が必修科目でなくとも授業で選択するのかを質問した。

表2 高校生：必修でなくとも英語を受講する

高校生	はい	どちらかといえば そうである	どちらかといえば そうではない	いいえ
男性 (n=74)	28.4% (n=21)	32.4% (n=24)	13.5% (n=10)	25.7% (n=19)
女性 (n=54)	35.2% (n=19)	35.2% (n=19)	9.3% (n=5)	24.1% (n=13)
男女 (n=128)	31.2% (n=40)	33.6% (n=43)	11.7% (n=15)	25% (n=32)

高校生の回答者は必修でなくとも英語を受講する（「はい」、「どちらか」というとそうである）と答えているのは、高校生男性：60.8%，高校生女性：70.4%であった。受講しない（「どちらか」というとそうではない、「いいえ」と考えている割合は、男性：39.2%，女性：33.4%で、受講すると考えている割合の方がかなり高いことがわかる。高校生女性の割合は倍以上となる。

英語が必修でなくとも英語の授業を選択する、もしくはどちらかというを選択すると答えている高校生女性の方が男子と比べて10.4%高い。

図1では、英語を選択すると答えた（「はい」、「どちらか」というとそうである）回答者の自由回答の英語を選択する理由を図1で示した。

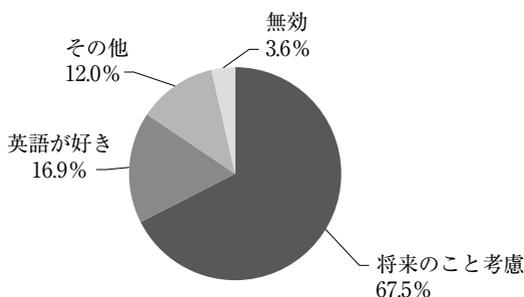


図1 英語を受講する理由

英語が必修科目でなくとも選択すると回答した回答者の中で一番多かった回答は、67.5% (n=56) が英語は将来、必要になるといった“未来”の

必要性についての回答であった。「今後の社会では必要なため」、「大学入試に必要なため」「将来役に立つため」等が目立ち、近い将来の大学受験に備えてのことで、「英検が必要なため」などの意見もあった。次に多かったのは、英語が「好きだから」、「得意だから」の16.9% (n = 14) であった。

表2で「どちらかというところではない」、「いいえ」と回答した中から自由回答の理由で多かった回答を図2で示した。

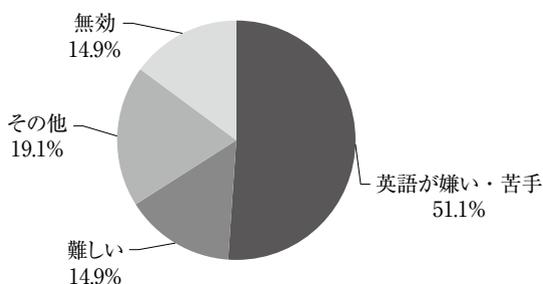


図2 英語を受講しない理由

51.1% (n=24) と多かったのは英語が「嫌い」、「苦手」であった。次に多かったのが、14.9% (n=7) の英語が「難しい」であった。

大学生には、英語は必修だから受講しているかを質問した。

表3 大学生：必修だから英語を受講している

大学生	はい	どちらかといえば そうである	どちらかといえば そうではない	いいえ
男性 (n=88)	55.7% (n=49)	29.5% (n=26)	11.4% (n=10)	3.4% (n=3)
女性 (n=19)	57.9% (n=11)	31.6% (n=6)	10.5% (n=2)	0% (n=0)
男女 (n=107)	56.1% (n=60)	29.9% (n=32)	11.2% (n=12)	2.8% (n=3)

男性、女性とも「はい」が50%を超えている。「はい」、「どちらかとい

えばそうである」と回答したのは男性，女性とも 85% を超えている。男性：85.2%，女性：89.5% とかなり高いことがわかる。

この質問に対しての自由回答の中で一番多い理由は「進級に必要なため」と 18.7% (n=17) の人が回答している。しかし，2 番目に多かった意見は，英語は必要だとは理解しているが，「難しい」や「苦手」が 9.8% (n=9) のであった。

5.2 ① need-motive value “原動力の必要性”

Kanfer (1990) の① need-motive value “原動力の必要性” 英語を学ぶ目標を探るため英語が得意もしくは「英語が得意」もしくは「英語ができる」と言えるようになりたいのか質問した。英語にどれくらい魅力を感じているのかを理解する理由からであった。

表 4 「英語が得意」もしくは「英語ができる」と言えるようになりたい

	はい	どちらかという そうである	どちらかという そうではない	いいえ
高校生：男性 (n=74)	66.2% (n=49)	21.6% (n=16)	6.7% (n=5)	5.4% (n=4)
高校生：女性 (n=54)	66.7% (n=36)	31.5% (n=17)	0% (n=0)	1.9% (n=1)
高校生：男女 (n=128)	66.4% (n=85)	25.8% (n=33)	3.9% (n=5)	3.9% (n=5)
大学生：男性 (n=88)	85.2% (n=75)	13.6% (n=12)	1.1% (n=1)	0% (n=0)
大学生：女性 (n=19)	94.7% (n=18)	5.3% (n=1)	0% (n=0)	0% (n=0)
大学生：男女 (n=107)	86.9% (n=93)	12.1% (n=13)	0.9% (n=1)	0% (n=0)

表 4 をみても回答者の高校生も大学生もかなり高い割合で「英語が得意」もしくは「英語ができる」と言いたい，もしくは「どちらかと言いたい」と答えている。大学生女性に対しては 100% で，次に高いのは大学生男性 98.9% であった。しかし高校生男性は 87.8% と一番低く，高校生女性は 98.2% となり，大学生の回答とあまり変わらないことがわかった。

回答者たちが英語で得意意識を持ちたい中、どの技能を重要視しているのか質問した。通常は英語4技能であるが、将来を考え大学受験や資格試験を重視した回答者も考えられることから文法も選択肢に入れた。この質問から回答者がどの技能を重視しているのかを把握することができる。

表5 英語の中でできたら一番良いと思う技能

	リスニング	スピーキング	リーディング	ライティング	文法	無回答
高校生： 男性 (n=74)	29.7% (n=22)	43.2% (n=32)	13.5% (n=10)	2.7% (n=2)	5.4% (n=4)	5.4% (n=4)
高校生： 女性 (n=54)	22.2% (n=12)	50% (n=27)	0% (n=0)	9.3% (n=5)	16.7% (n=9)	1.9% (n=1)
高校生： 男女 (n=128)	26.6% (n=34)	46.1% (n=59)	7.8% (n=10)	5.5% (n=7)	10.2% (n=13)	3.9% (n=5)
大学生： 男性 (n=88)	27.3% (n=24)	59.1% (n=52)	11.4% (n=10)	1.1% (n=1)	1.1% (n=1)	0% (n=0)
大学生： 女性 (n=19)	15.8% (n=3)	63.2% (n=12)	10.5% (n=2)	0% (n=0)	10.5% (n=2)	0% (n=0)
大学生： 男女 (n=107)	25.2% (n=27)	59.8% (n=54)	11.2% (n=12)	0.9% (n=1)	2.8% (n=3)	0% (n=0)

回答者たちは、スピーキング（高校男性：43.2%，高校生女性：50%，大学生男性：59.1%，大学生女性：63.2%）を一番、得意意識を持ちたいという結果になった。しかしその中で一番高い大学生女性と一番低い高校生男性を比較すると20%差がある。どの回答者もスピーキングの次にはリスニングができるようになりたいと考えている傾向にあるが、高校生男性はその中でも多少であるが他の回答者に比べて高いことがわかった。リスニングを選んだ理由で多かったのは、高校生も大学生も「リスニングがわからないと何を言っているのかわからないため」という理由であった。しかし、自由回答ではスピーキングに役立たせるため、まずはリスニングができれば、次のステップのスピーキングにつながるという考えであるよう

だった。

高校生女性はリーディングに対し0%であるのに対し、高校生男性はリーディングで13.5%と3番目に高いこともわかった。高校生女性と大学生女性は、男性と比べると文法ができれば良いと考えている傾向があるということも示されていた。

大学生は、ライティングと文法ができるようになりたいと考えている割合が低いことがわかった。高校生よりも大学生の方がスピーキングを上達させたいと考えている割合が高いことも見られた。回答者の大学生は、男性、女性とも約60%の回答者がスピーキングを選択している。

英語を学ぶことに何らかの目標になるようなモチベーションはあるのかを探るために自由回答欄で「英語ができればしたいことはありますか」と質問をした。

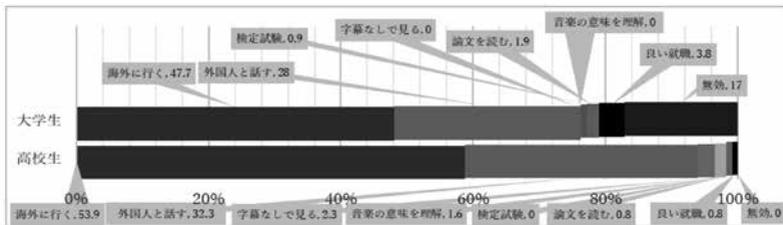


図3 英語を使ってしたいこと

高校生で一番高かったのが、53.9% (n=69) が「海外に行きたい」であった。次に多かったのが、31.3% (n=40) が「外国人と話したい」であった。趣味に使うこととして、3人「映画を字幕なしでみたい」、2人「英語の音楽の意味が知りたい」があった。資格の英検で役に立てたいという意見も2人いた。その他にも少数ではあったが、1人は「英語の論文を読みたい」、「良い就職がしたい」と答えていた。

大学生も47.7% (n=51) が「海外に行きたい」で一番高かった。2番目

も高校生の回答と同じで28% (n=30)「外国人と話したい」であった。そして、外国人と話し、友達になりたいという意見が目立った。4人が「良い就職がしたい」、2人が「英語の論文を読みたい」、1人「英語資格に役立てる」という意見であった。

次は、この調査の英語を習得するための理由は見えてきたが、その努力や行動を把握していく質問をした。

5.3 ② cognitive choice “認知行動の選択” と

③ self-regulation-metacognition “自己制御認知”

Kanfer (1990) ② cognitive choice “認知行動の選択” の「どれだけ努力をするか」③ self-regulation-metacognition “自己制御認知” 「モチベーションを持ち、保つための行動をとっているのか」を探り、目標に向かい英語能力を保ち、高めるよう自発的に英語を勉強した経験を質問した。自発的に勉強をした経験を聞いた。

表6 英語を自発的に勉強した経験

	ある、又は どちらかというところ	ない、 どちらかというところ	無効
高校生：男性 (n=74)	66.2% (n=49)	28.4% (n=21)	5.4% (n=4)
高校生：女性 (n=54)	66.7% (n=36)	31.5% (n=17)	1.9% (n=1)
高校生：男女 (n=128)	66.4% (n=85)	29.7% (n=38)	3.9% (n=5)
大学生：男性 (n=88)	55.7% (n=49)	44.3% (n=39)	0% (n=0)
大学生：女性 (n=19)	78.9% (n=15)	21.1% (n=4)	0% (n=0)
大学生：男女 (n=107)	59.8% (n=64)	40.2% (n=43)	0% (n=0)

学校の勉強以外に英語を自ら英語を学んだ経験を質問した結果、表6のようにどの回答者をもみても自ら勉強をしている割合の方が、していないという回答よりも高いことがわかった。特に高いのは大学生女性であり、一番低い、大学生男性と比べて23.2%の差があるという結果であった。高校

生は男性，女性とも差がほぼみられず自発的に勉強したと答えた回答者が66%であった。

男性と女性の差が高い大学生の英語学習経験を探るため英会話教室や塾での経験を質問した。これは，先行研究の Berwick と Ross (1989) の研究から日本人は学ぶ環境 (クラス) がモチベーションに関係していると発見されているため，過去の学習経験も聞くことの重要性を感じたからだ。

表7 大学生：英会話教室，塾で英語を学んだ経験

	ある	ない
大学生：男性 (n=88)	50% (n=44)	50% (n=44)
大学生：女性 (n=19)	68.4% (n=13)	31.6% (n=6)
大学生：男女 (n=107)	53.3% (n=57)	56.7% (n=50)

男性学生は英会話教室や塾で英語を学んだ「経験がある」と答えた回答者と「経験がない」と答えた回答者が50%と半分だった。女性は「経験がある」と答えた回答者は68.4%で、「経験がない」を上回っていた。

③ self-regulation-metacognition “自己制御認知” 「モチベーションを持ち，保つ何か行動をとっているのか」を探るため，授業で好きだった授業の内容と経験，嫌いだった授業の内容と経験と自由回答で聞いた。高校生は，体育，社会，国語といった教科を書く生徒が多く，具体的な内容を示すものはあまりなかった。短く書いたものがほとんどで，楽しかった経験では，1人は「クラスでのディスカッション」，2人は「英会話」，2人は「ゲームをしながらの授業」と記入されていた。嫌いだった体験では短く答えられた「中学校のとき」，「高校のとき」のようなものが多く，あまり例を挙げて記入されているのはなかったが，「問題を解く授業」，「英訳する授業」などがあった。

大学生の英語の授業で好きだった経験は、「英会話の授業」が6人だった。そして、「小学校の授業」が3人、「映画を見た授業」と答えたのが2人であった。嫌だった体験は「テストを受けているとき」が10人、「わからない問題を解いているとき」が3人、「文法をならっているとき」が2人、「長文を読んでいるとき」が2人であった。他にも「怒られたとき」など1人ずつ様々な理由が挙げられていた。

6. ディスカッション

今回の調査は、便宜的標本抽出法、便宜的なサンプルの調査であることから一般論化や全体の平均や違いとして見られるものではないが、この調査でわかったことや傾向を述べていく。

昨年行った大学生へのグループワークについての調査では、英語が「好き」、「どちらかというとき好き」の3大学の平均が47.9%、「嫌い」、「どちらかというとき嫌い」と約半分の結果になっている（小島, 2023）。今回の調査では、英語が「好き」、「どちらかというとき好き」と答えているのは、40.1%（男性: 43.1%, 女性: 37.1%）となり、比較してみると低い結果となっている。今回の調査では、男性と女性の違いも調査の項目にいたため、多少ではあるが違いも読み取ることができた。高校生男性と大学生男性の英語に対して「好き」もしくは「嫌い」で比較するとあまり差がないが、高校女性と大学女性では約10%の差がわかった。しかし、残念なことに自由回答で理由を書いてくれる回答者がほほいかなかったためその理由を深く探ることはできなかった。質的調査のインタビュー形式で調査であれば、より深く質問をすることができたので、今後はインタビュー形式で調査の必要性を感じた。今回の調査では大学生女性の数も男性と比べるとかなり少ないことも考慮する必要があるのかもしれない。大阪商業大学で506名に行った英語意識喪失調査では、26%の回答者は「英語が嫌い」、

42.4%がどちらかという嫌い, 8.5%が好きという結果であった(津沼, 2010)。この大阪商業大学の調査(津沼, 2010)と比べると今回の調査は、「英語が嫌い」もしくは「どちらかという嫌い」と述べている割合は低い。

本稿の結果でも述べているが, 大学生は「英語は必修だから履修している」という質問に対し, 男性と女性が85%で「はい」, 「どちらかというところである」とかなり高い割合で答えている。しかし高校生は必修でなくても選択すると答えている割合の方が高く, 理由として挙げられたのは, 「将来のことを考えて」という回答が多かった。大学生は履修している理由として最も多かったのは, 「進級のため」というものであった。これらの理由が今回の調査対象者の② cognitive choice “認知行動の選択” になっているようだ。大学生は近い未来の卒業という認知行動の傾向が強く, 高校生はもう少し長いスパンの未来の認知行動から英語を学ぶ傾向にあるようにも読み取れた。

英語が「得意」もしくは「できる」と言いたいと考えている割合は高校生も大学生もかなり高いことが理解できた。高校生男性の87.8%を除けば, 98%以上が「得意」もしくは「できる」と言えるようになりたいことがわかった。勿論, 何事もできる方ができないよりも良いのは理解できるが, 大学生の女性を見ると全員の100%になる。英語の必要性や重要性を感じていることがわかる。だが, 自由回答欄では大学生男性とあまり違いはなく, 海外に行くことや外国人と話す, 趣味に生かすということが多かった。著者は, 就職に関して優位であるという意見が多くでるかと思ったが, そのような結果にはならなかった。先行研究のBerwickとRoss(1989)で述べたが, 日本人は就職で英語ができると有利であるということや社会の就職に対するプレッシャーは少ないのかもしれないと感じた。自分のために英語を使って楽しみたいということの現れかもしれない。そして, 他の教科でこのような質問をしたらここまで高い結果とはならない

のではないか。英語を使う人口の方が英語を母国語とする人数を上回っていることから英語が言語として、そして教育の中で重要な位置を占めているかがわかる (Galloway, 2033; Robson, 2013)。

著者が予想していた英語ができれば「社会に出て有利」や「就職に有利」という意見もあったが、それらの意見よりも多かったのが、大学生も高校生も「海外に行きたい」や「外国人と話す」ことが多く理由に挙げられていた。「楽しいから海外に行きたい」、「海外に行き楽しみたい」や「外国人と話した経験から楽しかった」という理由を自由回答で述べていることから、「楽しむ」ことを目的で、そのために目標として英語を学ぶという傾向にあるようであった。

回答者は、英語の技能の中でも最もスピーキングが上手になりたいと考えていた。次いでリスニングを選択していて、聞いて話をしたいということもわかった。

この調査では英語を学校で学んでいる理由の大学生の多くは、進級を理由に挙げているが、英語ができれば良いと考えている割合は高校生よりも高く、スピーキングは割合で見ると14.6%の差があることである。大学生の英語に対するモチベーションは必ずしも低いとは言えないと読み取れた。授業に対してのモチベーションは高校生と比べると低いが、英語で話をしたいということに対しては、モチベーションを持っているということの現れではないかと考える。

又、高校生の方が文法を上達させたい、できるようになりたいと考えている割合が大学生よりも高いことが読み取れた。このことから高校生は、入試のことも考えてと推測する。検定試験を理由に挙げている高校生と大学生の回答者もいたが、就職試験は英語の試験を行うことは少ないが、大学受験では英語の試験を受ける必要が高いという理由からだと考えられる。

英語を自発的に学んだ経験はどの回答者を見ても高いことはわかった。

高校生は男性、女性とも66%を超えていて、大学生も男性が55.7%、女性は78.9%となっている。② cognitive choice “認知行動の選択”と③ self-regulation-metacognition “自己制御認知”では、この調査の回答者は、自発的に単語帳や教材を購入し学んだ経験を述べている。この自由回答で述べてくれている回答者は少なく、教材を購入し自宅で勉強したという意見しか見られなかった。これは、今後の調査で質問を改善しなくてはならない。

大学生に塾や英会話教室の経験を尋ねたところ男性は50%、女性は68.4%の経験があった。大学生に英語を学校以外で学んだ経験のある回答者の中から自由回答で「自分から英語を学ぼうと考えた」のかもしくは「他の人からの助言で学んだのか」質問した。その回答には、45.6% (n=26) が「自分から学ぼうとして」という意見であった。自分以外の「他の人からの意見」から学んだと答えたのは42%であった。そのうち36.8% (n=21) 「家族からの勧め」と「塾の先生の勧め」が2人と「友人からの勧め」が1人であった。「自分から学ぼうとした」という意見と「他の人からの意見」とあまりかわかないことがわかった。

学んだ経験として、肯定的な意見も否定的も意見も記入してくれた回答者は少なかった。否定的な意見は「親に勉強を強要された」や「先生に怒られた」などの意見が述べられていた。肯定的な学ぶ経験としては、小学校や幼い時期のゲームや音楽、映像で学んだ経験が挙げられていた。モチベーションを高めるには教材を適切に使用し副材料を使いながら学ぶ環境を作ることの重要性 (Harmer, 2007) と学びながら楽しむ勉強法こそがモチベーションを持続させ、言語を上達させる方法である (Ellis, 2003; Dörnyei, 2005) とこの結果からも発見できた。

この調査をする目的となった大学生の英語学習に対するモチベーションは、学校で行われている英語教育に対しては下がっている可能性はあるが、英語へのモチベーションは下がっていない可能性があると考え

えられる。大学生の自由回答欄で書かれていたことは「会話中心のスピーキングの授業にして欲しい」「会話を学びたい」「役に立つので会話を学びたい」という会話を中心にした授業を望んでいる意見が目立った。先行研究の Berwick・Ross (1989) と Ushioda (2013) の研究では、「テスト疲れにより大学生のモチベーションは下がっている」という結果だったが、学びたいことが選択して学べていないということからモチベーションが下がる要因のひとつなのかとも考えた。今後の研究でこのことについて焦点を当てて調べていきたいと感じた。今回の調査では期待していたように回答者の自由回答欄から英語教育に関して学んできた過程や経験、そしてどのようなことが英語を学ぶ上でモチベーションがとなり、モチベーションを下げているのかを詳しく読み解くことだったが、回答自由欄で短い文章や空欄が目立ったことから読み取るということまでには至らなかった。だがこの研究を通して大きな意味で、今後の研究の方向性や先行研究とは異なった結果を知れたということはこの調査の重要性や必要性も感じた。

それから今回の調査の目的となった将来の夢や職業のことを益々、直視して考えることが多くなる「大学生は、英語のモチベーションは下がっていない」のではないかとあったが「職業や社会で成功をする」という目的で英語を学ぶというよりは、「楽しいから海外旅行に行きたい」や「楽しいから外国人と話してみたい、友達を作ってみたい」という「楽しいから」という理由から英語を学び、習得したいと考えている傾向が強いことがわかった。本稿の結果の冒頭でも述べたが、今回は便宜的標本抽出法、便宜的なサンプルの調査で、全国の平均のような一般化できるような結果を出すことはできないが、先行研究の英語学習に対する3カ国のモチベーション比較の発見「日本人はクラスでの学び方で学習モチベーションに影響を与える傾向にある」と今回の発見とは類似していたことは、今後のモチベーションと英語学習法の研究を追及していく必

要性があると感じた。そして、楽しみながら学ぶというクラス作りをしていきたいと改めて考えた。

この調査で大学生の英語に対するモチベーションは落ちていない傾向も見受けられたが、しかし「英語が好き」がどうかについて問うと、高校生と大学生では高校生の方が「英語が好き」と答えている回答者が多かった。大学生は、高校生と違い大学入試の勉強もする必要がなくなっている。この調査で理解できたように大学生こそ英語の能力を上げるということだけに焦点を当てるのではなく、まずは英語を楽しく学ぶことから始めることが必要なのではないかと考えた。著者の経験からもクラスで海外の話などをすると学習者達は耳を傾けてくれることが多い。語学だけでなく海外の国への興味から英語を学ぶ機会も作る重要性もこの研究から感じた。語学学習では、教材や副教材では話題になっている題材などを使い、ゲームや音楽、映像を使用し学習者の興味を引くような授業作りをしていくことも大切である (Hedge, 2000)。そして英語の授業で上手く4技能を取り入れながら授業を進めていくことの必要性がある (Ellis, 2008; Nunan, 2004)。

7. 今後の展望

最後にこの調査では、質的調査のインタビュー形式で調査を行っていないため、意見を深く探ることができなかった (Mason, 2002)。自由回答に意見を述べてもらう質問を多くし、その中から回答者の意見を読み解きたいという意図であったが、解答数が少なかったこととその意見がどういう意味や趣旨、意向があるのか、その意見の過程を深く読み取ることが困難であった。例を挙げると「今までで楽しかった授業の経験を教えてください」できるだけ詳しくお願いしますと書かれていたが、「中学の授業」など短いものが多かった。このことからインタビュー形式の質的調査の必

要性も感じた。今後は言語学習者にインタビューを実施し、より深い調査実施し、言語習得についてのプロセスやモチベーションについて研究を続けたい。そして、学習者のモチベーションを高め、保つ方法を見つめることで、英語嫌いや苦手意識も減っているのではないか。これからも言語習得に役立つ授業作りができるように努力していきたい。

引用文献

- 英検. 受験の状況. <https://www.eiken.or.jp/eiken/merit/situation/>.
- 総務省統計局. (2023). 労働力調査 (基本集計) 2023 年 (令和 5 年) 4 月分結果. <https://www.stat.go.jp/data/roudou/sokuhou/tsuki/index.html>.
- 小島和枝 (2023). アクティヴ・ラーニング：共同学習が与える大学生英語学習者への影響：工学部の学生と法学部の学生の比較. 拓殖大学理工学研究所, 20 : 23-32.
- 津村修司. (2010). 英語学習意欲喪失の要因と英語の好き・嫌いとの関係. 大阪商業大学論集, 2010 (5) : 27-42.
- 西澤脩. (2001). 次世代の人材育成は「教育」より「学習」で学習のモチベーション効果を高めるには. 学術の動向, 2001 (5) : 36-39. http://journal.takushoku-u.ac.jp/lcri/lcri_148.pdf.
- ベネッセ. (2022). 高3生の英語学習に関する調査：2015-2021 継続調査. 2022 : 1-16. https://berd.benesse.jp/up_images/research/kousaneigo2021.pdf
- 文部科学省. (2019). 令和3年度大学入学者選抜に係る大学入試英語成績提供システム運営大綱の廃止について. https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/11/15/1397734_19.pdf
- 文部科学省. (2021). 令和3年度学校基本調査 (確定値) の公表について. https://www.mext.go.jp/content/20211222-mxt_chousa01-000019664-1.pdf.
- 文部科学省. (2022). 令和4年度大学等卒業予定者の就職内定状況調査. https://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/naitei/kekka/k_detail/1422624_00004.htm.
- Berwick, R., and Ross, S. (1989). Motivation After Matriculation: Are Japanese Learners of English still Alive After the Exam Hell? JALT Journal, 11 (2): 193-210.

- Dörnyei, Z. (2005). *The Psychology of the Language Learner: Individual Differences in Second Language Acquisition*. New Jersey: Lawrence Erlbaum.
- Ellis, R. (2003). *Task-Based Language Learning and Teaching*. Oxford: Oxford University Press.
- Ellis, R. (2008). *The Study of Second Language Acquisition*. Oxford: Oxford University Press.
- Galloway, G. (2013) *Global Englishes and English Language Teaching (ELT) Bridging the Gap Between Theory and Practice in a Japanese Context. An International Journal of Educational Technology and Applied Linguistics*, 41 (3): 80-92.
- Gardner, R. C. (2001). 'Integrative Motivation and Second Language Acquisition'. pp. 1-19. In Z. Dörnyei, and R. Schmidt, (Eds.). *Motivation and Second Language Acquisition*. Honolulu: National Foreign Language Resource Centre.
- Harmer, J. (2007) *How to Teach English*. Essex: Longman.
- Hedge, T. (2000). *Teaching and Learning in the Language Classroom*. Oxford: Oxford University Press.
- ILO. (2023) Unemployment, Total. <https://data.worldbank.org/indicator/SLUEM.TOTL.ZS>
- Kanfer, R. (1990). *Handbook of industrial and organizational psychology*. Consulting Psychologists Press. 3: 75-170.
- Leitch, C. M., Hill, F. M., and Harrison, R.T. (2010). *The Philosophy and Practice of Interpretivist Research in Entrepreneurship. Organizational Research Methods*, 13 (1): 67-84.
- Mason, J. (2002). *Qualitative Researching*. London: Sage Publications.
- Nunan, D. (2004). *Task-Based Language Teaching*. Cambridge: Cambridge University Press.
- OECD. (2021). *高等教育修了者数*. <https://www.oecd.org/tokyo/statistics/>
- Patton, M. Q. (2001). *Qualitative Evaluation and Research Methods*. California: Sage.
- Robson, M. (2013). *The English Effect*. <https://www.britishcouncil.org/sites/default/files/english-effect-report-v2.pdf>.
- Taguchi, T., Magid, M., and P. Mostafa, (2010). 'The L2 Motivational Self System among Japanese, Chinese and Iranian Learners of English: A Com-

parative Study'. pp. 66-97. In Z. Dörnyei, and E. Ushioda, (Eds.) *Motivation, Language Identity and the L2 Self*. Bristol: Multilingual Matters.

Ushioda, E. (2013). 'Foreigner Language Motivation Research in Japan: An 'Insider' Perspective From Outside Japan'. pp. 1-15. In M.T. Apple, D. Da Silva, and T. Fellner, (Eds.). *Language Learning Motivation in Japan*. Bristol: Multilingual Matters.

Appendix:

高校生用アンケート

__アンケートにご協力お願いします。目的は、「英語を勉強するモチベーション」を探るものです。名前を記入する必要はありません。このアンケートは研究材料に使われることがあります、個人が特定できるものではありません。今後の授業向上に役立てていくものです。こちらのアンケートは成績等に関係するものではありません。ボランティアとして、ご協力していただくもので、強制的なものではありません。アンケートに協力できる方だけ、アンケートに答えて下さい。何か不明な箇所があれば質問にも応じますので、声を掛けて下さい。どうぞよろしくお願いいたします。

- ① 性別を答えて下さい。
男性 女性
- ② 英語は好きですか。
好き どちらかといえば好き どちらかといえば嫌い 嫌い
- ③ ②で答えた理由を教えてくださいませんか。お願いします。
- ④ 高校で英語が必修科目でなかったとしたら英語を選択しますか。
はい どちらかといえばそうである どちらかというところではない
いいえ
- ⑤ ④で答えた理由を教えてくださいませんか。お願いします。
- ⑥ 英語が得意な方もいらっしゃると思いますが、「英語ができる」または「英語が得意」と言えるようになりたいですか。
はい どちらかといえばそうである どちらかというところではない
いいえ
- ⑦ ⑥で「はい」もしくは「どちらかといえばそうである」と答えた方にお聞きします。英語ができたらしたいことや夢はありますか。いくつでも構いません。教えてくださいませんか。お願いします。

したいこと

例：「字幕なしで映画を見る」「海外旅行に行く」等。

夢

例：「通訳になる」「英語を使い良い職業に就き、お金を儲ける」等。

- ⑧ ⑥で「いいえ」「どちらかというそうではない」と答えた方にお聞きします。英語ができることにあまり関心がないことへの理由を教えてくださいませんか。どんなことでもいくつでも構いませんので、書いていただければ幸いです。お願いします。
- ⑨ 英語の中でできたら一番良いと思うのは、どれですか。1つ選んでください。
リスニング スピーキング リーディング ライティング 文法
- ⑩ ⑨で答えた理由を教えてくださいませんか。お願いします。
- ⑪ 高校の授業以外で英語の勉強を**自発的**にしている、していたことはありますか。例：「高校や中学の教科書以外に単語帳を買い、勉強をした」「親に頼み英語塾や英会話に自発的に通った」等。
ある どちらかといえばある どちらかといえはない ない
- ⑫ ⑪で「ある」「どちらかといえばある」と答えた方にお聞きします。どんなことをしていますか、もしくはしていましたか。教えてください。例：「高校や中学の教科書以外に単語帳を買い、勉強をした」「親に頼み英語塾や英会話に自発的に参加した」等です。
- ⑬ ⑫で「ない」「どちらかといえはない」と答えた方にお聞きします。自発的に英語を勉強しない理由を教えてくださいませんか。お願いします。例：「学校の授業だけで十分だと感じるから」「英語の勉強をこれ以上したくないから」等。

アンケートは以上です。ご協力いただき有り難う御座いました。

大学生用アンケート

アンケートにご協力をお願いします。目的は、英語を勉強する上でのモチベーションとは何かを探るものです。このアンケートは研究材料に使われることがありますが、名前等は記入必要がなく、個人情報が増えることはありません。そして、今後の授業向上に役立てていくものです。こちらのアンケートは成績等に関係するものではありません。ボランティアとして、ご協力していただくもので、強制的なものではありません。どうぞよろしく願いいたします。何か不明な箇所があれば質問にも応じますので、声を掛けて下さい。

- ① 大学何年生ですか。
1年生 2年生 3年生 4年生

- ② 性別を答えて下さい。
男性 女性

- ③ 英語は好きですか。
好き どちらかといえば好き どちらかといえば嫌い 嫌い

- ④ ③で答えた理由を教えてくださいませんか。お願いします。

- ⑤ 必修だから英語を受講していますか。
はい どちらかといえばそうである どちらかというところではない
いいえ

- ⑥ ⑤で答えた理由を教えてくださいませんか。お願いします。

- ⑦ 英語ができれば良いとは思いますが。
はい どちらかといえばそうである どちらかというところではない
いいえ

- ⑧ ⑦で答えた理由を教えてくださいませんか。お願いします。

- ⑨ 英語の中でできたら一番良いと思うのは、どれですか。1つ選んでください。
リスニング スピーキング リーディング ライティング 文法

- ⑩ ⑨で答えた理由を教えてください。お願いします。
- ⑪ 語ができたらしたいことはありますか。自由にお答えください。お願いします。
- ⑫ 英語を自発的に学んだことがありますか。例えば、学校で出される宿題等とは別に自分から英語を学ぼうと思ひ勉強をした経験のことです。自発的に単語帳や文法を学ぶ、英語塾や英会話に自発的に参加等。
ない どちらともいえない いいえ
- ⑬ ⑪で答えた理由や経験を教えてください。お願いします。
- ⑭ 学校以外で英語を学んだ経験がありますか。(英語)塾や英会話教室等です。
はい いいえ
- ⑮ ⑬で「はい」と答えた方にお聞きします。その理由は自分から「学びたい」や「学ばなければ」と感じたからですか。それとも家族や友達、自分以外の人からの影響や助言からですか。ご経験を教えてください。お願いします。今まで学んできた英語の授業で楽しかった経験を教えてください。学校での授業の経験も含みます。いつ、どこでどのような授業でしたか。1回の経験でなくとも複数の違った経験を書いていただいても構いません。学校以外でも良いです。お願いします。
いつ
どこで
どんな経験
- ⑯ 今までの英語の授業で嫌だった経験を教えてください。学校での授業の経験も含みます。いつ、どこでどのような授業でしたか。学校以外でも良いです。お願いします。
いつ
どこで
どんな経験

アンケートは以上です。ご協力いただき有り難う御座いました。他に伝えたいことがあれば自由に意見を聞かせて下さい。どんなことでも構いません。どうぞよろしく申し上げます。